

【特集】

IAML ローマ大会

July 3 - 8, 2016, Rome, Italy

【特集】 2016 IAML Congress, Rome, Italy

図書館が示すイタリア音楽の伝播	荒川恒子	1
利用者指向の情報サービスをめざしたメタデータ 構築とは	伊藤真理	4
IAML2016 ローマ大会 – Semantic Web の時代へ	藤堂雍子	9
初めて国際大会に参加して	山本宗由	11
IAML ローマ大会参加の記	久保絵里麻	13
事務局だより		16

図書館が示すイタリア音楽の伝播

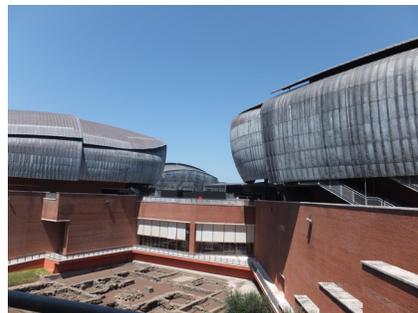
支部長 荒川 恒子

大会出席のためにローマのフィウミチーノ空港に降り立ったのは、コンGRES前日7月2日(土)の夕方でした。RILMの仕事をされておられる同行の那須聡子さんと相談して、バスで景色をみながら、ローマに入ることにしました。宿泊はテルミニの近くのホテルでした。ローマ国立中央図書館を向いに見、閑静な住宅地である周辺には、地元の人向けの食事処が多く、私はイタリア人のごく一般的な生活振りを垣間見ることができました。

翌日はいざ会議場、音楽公会堂公園 Auditorium Parco della Musica です。テルミニからは様々な行き方があります。まずはバ

スで直行、または地下鉄でポポロ広場脇にあるフラミニオ駅へ、それから路面電車です。バスで景色を見ながら、音楽家の名前の付いた通りを走ると、イタリア・バロック音楽の隆盛振りが分かります。また通りごとに夾竹桃、南国の花のつく木々が咲き乱れ、美しさに見とれながらの往復でした。なお街の間中にヴォルゲーゼ公園が、どっしりと広がっていますので、そこを迂回しなければなりません。ということは、到着地は同じバスでも、番号により様々な経路を通り、おまけに多くは循環します。お蔭で大回りをしながら、ゆったりとローマ見物もできました。

さて数多のプログラムの中で、今回は参加するものをはっきりと決めずに出かけました。しかし結果的には焦点が絞られ、筆者自身に非常に学びの多い会となりました。そのきっかけは私とメンティとの出会いです。会議第1目の最初のお茶の時間に、メンターとメンティの顔合わせがあります。お世話になることへのせめての御礼として、



Auditorium Parco della Musica (会場)

私はいつもメンター役を引き受けています。ピア・シェクターさんが本部の事務局長になられてから、この制度は大変重視されています。折角参加しても知り合いもなく、心配顔の方がおられないようにとの配慮です。前もってメールでメンティの名前が知らされます。スイスはソロテュルン中央図書館に勤務なさる年配の方、ブラウンさんでした。何故あなたにメンターが必要な、とびっくりしながら問う私に、自分の専門は歴史であること、しかし音楽資料のカタログ作成の仕事を任せられ、専門の方が多く集まるこの会議ならば、仕事に必要なことを学べると考えたこと、我々は面白い組み合わせだね、自分は日本に行ったことがないけれど、日頃日本の音楽事情について不思議に思っていることを尋ねても良いか、ということになりました。彼とは会議中しばしば通りすがりにも言葉を交わしました。二日目の夜ナヴォナ広場近くのサンタ・マリア・デッラニマ Santa Maria dell' Anima 教会で、パレストリーナと当教会楽団の指揮者フラヴィオ・コルツォ作曲の宗教曲のコンサートがありました(写真 p 8)。私はブラウンさんとその建物を見ていました。突然彼が、これはドイツ教会だ、側廊の形から分かるよというのです。ということは我々が今立っているあたりは、ドイツ人街のはずです。かの F. サンティーニ Santini (1778-1861) が住み、楽譜を収集したり、写譜したのはこのあたりです。今はドイツのミュンスター教区図書館に所蔵されているサンティーニ・コレクションに、私はしばしばお世話になっています。そこには 16 世紀から 19 世紀の、宗教音楽を中心にした手稿譜が約 4,500 点、印刷譜が 1,200 点等、全体で約 2000 曲が含まれています。何故ローマにあったコレクションが、今はドイツのミュンスターにあるのでしょうか。その奇跡のような物語を題材として、ドイツ、イタリアが協力しあい、西ドイツ放送協会により記録映画 "Santini's Netzwerk" が 2014 年に制作されました。この

フィルムは木曜日の夕方に上映されました。制作にはコルツォ氏も参加しておられ、金曜日に制作過程等のお話を聴くことができました。サンティーニの館は、ヨーロッパ各地からローマを訪れる人々の溜まり場で、文化交流のためのネットワークが築かれていました。その中にはメンデルスゾーン、リスト、スタソフ、ツェルター、ガスパリーニ等がいました。その結果 19 世紀に、忘却の彼方にあった昔の音楽に、息吹が吹き込まれた訳です。1853 年にミュンスターからローマを訪れた、若き僧侶にして教会音楽教師ベルンハルト・クヴァンテもサンティーニと交友関係を持った一人で、サンティーニの死後に、コレクションを引き継ぐ約束を取り付けました。事実コレクションは 1862 年にミュンスターに移管されました。その後は忘却、再発見、カタログ作成が繰り返され、1943 年の第二次大戦での街の崩壊、1946 年の大洪水により多くを失いつつも、今なおイタリア・ルネサンス、バロック音楽の隆盛の証としての役割を担っています。

ベルリン、ベルン、ポローニャ、ブリュッセル、ハレ、パリ、オクスフォード、ペテルブルク、ヴィーン等が過去の音楽の研究、演奏に関して共同作業を始めています。その他本会議中にポーランドのグダニスク、クロアチアのザグレブからも、まとまったイタリア・バロック音楽所蔵の報告がありました。バロック時代にアルプス以北の街々が、イタリア音楽から大きな影響を受けたことは、多くの先人の研究や言葉に示されています。今や具体例が提示され、実感をもってその事実を受け止めることができました。

水曜日午後のエクスカージョンとして、私はバロック・ローマの散歩を選択しました。スペイン広場で集合し、トレヴィの泉、パンテオン等、いわゆる観光コースを歩き、カンポ・デ・フィオーリを通り、ファルネーゼ宮の前で解散というものでした。途中でカラヴァッジョの絵を見るということで、サン・ルイージ・デイ・フ

ランチェージ教会を訪れました。これはフランスの守護神サン・ルイを祀るフランス人のための教会、周辺にはフランス語の本などを扱う店が多いことに気がつきました。またファルネーゼ宮の前での説明には、脇にスイス教会があったとのこと。その他ローマに特使を送り込んだり、商売のために滞在する人の多い国では、同国人の交流、母国語での典礼のために、自国教会を持っていたのです。今まで素晴らしい建築、絵画等に目を奪われ、その文化を生活の脈絡の中で捉えていなかったのが、新たな視点で街を観察することができました。インフラが整備され、素晴らしい技術力を備えて、海や河を北上して領土を拡大していった古代ローマ、街中で素晴らしい文化を花開かせ、外から人々を呼び込んだルネサンス、バロック時代。時代ごとに異なる文化と、彼等の精力的な生活振りは、現代のローマの街にも強く刻印されています。そのことを実感し、目と耳と足で生活範囲を計り、この地の過去・現在・未来を想像する、胸ときめく数日となりました。

勿論会議自体はいつもと同様で、多様なテーマや関心に基づき、図書館やアーカイヴを取り巻く状況、そこで働く方々の試みが列挙されていました。特に目立ったのは子供、若者の音楽教育に対する音楽学校、図書館のプロジェクト紹介、さらにデジタル時代における楽譜や文書の整理や公開に対する、図書館相互のネットワーク等、継続的な問題でした。特に多すぎる資料を前に、長らく苦悩していたイタリアの頑張りには、目を見張るものがありました。

最後に各支部の代表者会議の位置付けが高くなったことをお伝えします。以前は会議の席上で支部報告をする、または『フォンテス』用の原稿を提出するのみでした。しかし今では各支部の抱える問題を互いに話し合う場です。前もって提出した原稿の中から、今年は座長スタニスラフ・フラビア氏が、国際交流を取り挙げました。特に北欧の国々、日韓の交流が採り挙



レセプション会場にて（7月3日）
（前列左から）荒川恒子、那須聡子、伊藤真理
（後列左から）藤永一郎氏夫妻、藤堂雍子、山本宗由、久保絵里麻

げられ、韓国のチャエさんと私がソウル、東京で開催された会議についてお話ししました。IAMLが開催したものではありませんが、東京大学で開催された「近代アジアの音楽指導者エッケルト：プロイセンの山奥から東京・ソウルへ」、また来春東京で開催される国際音楽学会、東京の御紹介などをいたしました。

私がIAMLの会議に継続的に出席し始めたのは2003年のエストニア大会からです。この間会長が5回交代し、時の変化に晒されながらIAMLの課題や性格も変わってきました。最初の頃はクロージング・セッションが多く、図書館の現場の者でないと入りにくい雰囲気であった会議は、すっかり開放的になりました。今回参加された山田高誌さんと共に、このような機会に音楽学者も参加し、資料の状況に関する最新情報を得、研究に役立てたいと意を強くしました。
(あらかわつねこ)

本大会のプログラム、発表要旨・資料、総会議事録、各国支部レポート等を含む詳細はIAML本部サイトに掲載されています。ご一読ください。
<http://www.iaml.info/congresses/2016-rome>
(編集部)

利用者指向の情報サービスをめざした メタデータ構築とは

伊藤 真理
(愛知淑徳大学)

はじめに

2016年7月3日～8日に開催されたローマ会議は、筆者にとって2011年ダブリン会議以来の参加であった。“ずいぶん会わなかったね”と声をかけてくれた参加者もあり、懐かしさを覚える会議となった。筆者は当該会議において、参加者と幅広く詳細なディスカッションができることを期待して、ポスタープレゼンテーション形式で研究発表を行った。会議後にも継続して情報交換するなど、期待通りの成果があったと思っている。

本稿では、筆者の研究発表の概要とあわせて、セマンティックウェブに関連するセッションを中心としてまとめる。ローマ会議の抄録付きプログラムは、ウェブページからダウンロードできる¹⁾。加えて、当日の発表資料が順次ウェブページに掲載されている²⁾。筆者が参加したセッションの多くは、プレゼンテーション資料がほとんど見えなかったため、ウェブページでの掲載は大変助けになる。なお、セッションのスケジュールの関係で、関連するセッションを網羅的にかつ同程度の詳細さでご紹介できるわけではないことをお断りしておく。

東アジア音楽情報発見のためのメタデータ語彙の検討

セマンティックウェブ技術を用いたメタデータ構築に関し、筆者の現時点での考え方を提示する意味で、まず今会議で筆者が発表した研究成果の概要を示す(当日のポスターは註2「Poster session」を参照のこと)。

本研究の大目標は、音楽情報のメタデータ作成におけるウェブ環境での集合知の利用の可能性を検討することである。本研究は、その一歩として、セマンティックウェブでのメタデータのあり方を検討するための基礎研究として位置づけられている。この背景として、いみじくもGormanがRDA(Resource Description and Access)批判の中で述べているように³⁾、目録作成に対する予算的圧迫と関係者による低評価、外注の増加、利用者の検索行動と目録システムでの検索とのギャップ、があげられる。このように、従来のやり方ではメタデータ作成に限界があることは明らかである。同時に、こうした目録を取り巻く環境がグローバルな課題であることがわかる⁴⁾。

音楽情報の場合にはさらに、ウェブ上で各種のストリーミングサービス、リコメンデーションサービスが実現しており、これらとの共存も求められる。新しい目録規則であるRDAがリンクトデータ環境での設計を目指したこともふまえ、書誌情報だけでなく幅広い音楽情報を対象としてセマンティックウェブ環境でのメタデータのあり方を検討することは異質ではない。本研究では、デジタル化の進んでいる文化情報資源に着目し、取りかかりとして東アジア圏の伝統音楽を対象とした。今発表での研究目的は、当該分野での情報資源を記述するために、実体間の関係性を明らかにすることと、それらの関係を適切に表現できる語彙を検討することである。

情報提供において、利用者ニーズの把握は必要不可欠である。伝統音楽を対象とした情報探索行動研究はほとんど行われていないが、民族音楽学研究者はインターネット情報を活用していること、個人所蔵の情報を利用することが多い、などが明らかとなっている。したがって、特定の機関の蔵書目録のみでは情報を見つけにくい状況にあり、セマンティックウェブ技術を活用して様々な媒体の情報資源を発見できるようにすることは意義があると考えられる。ウェブ環

境では相互運用性を担保することが肝要である。そこで、既存のオントロジースキーマをできる限り活用すること、文化遺産分野での幅広いジャンルに対して応用可能性があることを検討の条件とした。

本調査では、国立国会図書館デジタルコレクション、梨花女子大学 Ewha Music database、国立国楽院データベースから同一作品の書誌情報を抽出し、さらに当該作品の研究論文を参照して実体間の関係を分析した。その結果、図書館コミュニティで普及している FRBR (Functional Requirements for Bibliographic Records) モデルでは関係性の表現に限界があり、芸術分野でのモデルなどの参照可能性が明らかとなった。Work レベルでは、歴史的、文献学的関係性を無視できないからである。FRBR 自体も国際博物館会議による CIDOC CRM (ICOM International Committee Documentation Conceptual Reference Model) との調整を図った FRBRoo (object-oriented formulation of FRBR)⁵⁾ を作成している。こうしたモデルを参照しながら、本研究結果で得られた成果についてさらに検討する予定である。

セマンティックウェブ関連セッションの概要

今会議でのウェブ環境でのメタデータ、データベース構築に関連するセッション（目録、データベース紹介は除く）では、the Forum of Commissions and Professional Branches 主催による下記の3つのセッション、<Cross-searching for data> (7月4日)、<Standards for music description> (同日)、<TEI, MEL, FRBR, Linked Data> (7月8日)、および、Cataloguing Commission 主催による <Tutorial session on DOREMUS project (I), (II)> (7月5日) が開催された。<Bibliographical approaches to early music> (Bibliography Commission 主催、7月4日) セッションにおいても、古楽分野で



ポスターセッション会場にて (7月5日)

"Metadata vocabulary for East Asian music resource discovery"

の作品の派生関係についてふれられており、筆者の発表と関連すると思われるテーマでの研究のようであったが、残念ながら参加できなかった。

上記のセッションを大きくグループ化すると、(1) セマンティックウェブ技術を用いたサービス、(2) 標準化、スキーマ検討の研究、に分けることができよう。下記に概要をまとめる。

(1) セマンティックウェブによるサービス

<Cross-searching for data> セッションでは、下記の3件の発表があった。

(i) MusicLibs

McGill University のチームによって開発された "MusicLibs" は、International Image Interoperability Framework (IIIF) に基づき、単一のインターフェースで複数の機関のウェブサーバから画像情報を探することができる。IIIF は、イギリス図書館、フランス国立図書館などを含む国際的なコンソーシアムでの利用が決まっている。これにより、国際的な相互運用性が担保され、各機関でのデータ変換の標準化が促進される。現在 60 以上の機関が採用していることである。利用者は該当する機関のデータを直接利用できるというメリットがある。あわせて、optical music recognition を用いた RODAN に

よるメロディ検索についても紹介された。

当然のことながら当該種の技術の限界は、ターゲットとなるデータベースが提供するメタデータの記述に依存するという点である。横断検索と同じく、統一した検索用インデックスが構築されているわけではないので、厳密な意味で検索結果に不整合が生じうる。ウェブの分散環境においては、限界という語は適切ではないかもしれない。むしろ、メタデータ提供者がこうした限界を認識したメタデータ作成を行うべきであろう。

(ii) Open Music Library

Alexander Street による、音楽研究のためのオープンアクセスでのデジタルリソースの構築である。音楽著作権については、クリエイティブコモンズライセンスによる情報が 2 倍の速度で増加しており、オープンアクセスによる情報資源の索引化は、特に学術コミュニティに求められている、という前提のもとに、雑誌記事、図書、録音映像データ、楽譜など、網羅的に収集することを目指している。現在、フランス国立図書館、イギリス図書館、アメリカ議会図書館など 6 国立図書館のリソースを収集している。

異種の情報を一元化することによって、単体で存在する機関リポジトリやデジタルコレクションなどの情報資源を有機的に関連づけ、学術コミュニティへの貢献のみならず、関連コミュニティ間での協働化を促進することも目指している。

営利を目的とするはずの企業がオープンアクセスサービスを提供することに違和感があるが、OML を契機として有料データの利用についても、適切なプラットフォームの検討をするとのことであった。まず無料データを用いて便利なサービスのあり方を模索している段階のようである。

(iii) CLORI: the Italian archive of cantata repertory

Universita degli Studi di Roma Tor Vergata で行われている自然言語処理技術を活かしたカンタータのコンテンツ検索に関する発表だった。複数の図書館の所蔵情報、ウェブ上のリコメンデーションに関する情報、RISM I データの互換を利用して、例えば、手稿譜と印刷譜の同定、マニュスクリプトのコピーリストを自動的に同定するなど、パターン認識による関連文献のマッチングが可能になった。この技術を他ジャンルにも活かすことができれば、量的分析研究が促進されるであろう。

(2) 標準化、スキーマの検討

利用者ニーズを満足させるためのスキーマ検討に関する発表については、<Standards for music description> (7 月 4 日) と <TEI, MEI, FRBR, Linked Data> (7 月 8 日) の両セッションが該当すると思われる。

<Standards for music description> セッションでは、(i) BIBFRAME の利用プロジェクトの紹介、(ii) 音楽情報に対応したオントロジー DOREMUS の紹介があった。なお、DOREMUS については、別日にチュートリアルも開催され、着目されているようである。

(i) The UC Davis BibFlow Project

BIBFRAME は、MARC に代わるフォーマットとしてアメリカ議会図書館が開発している。本発表は、カリフォルニア大学デービス校で、Zepheira と Kualii の協力を得て行われた BIBFRAME 利用についてのプロジェクト紹介だった⁶⁾。当該プロジェクトは 2016 年 4 月に終了している。当該プロジェクトでは、受け入れ、目録、デジタル化にいたるテクニカルサービス業務でのワークフローへの影響について検討している。その結果として、MARC データとリンクデータの行程イメージを示すことができたようである。

(ii) DOREMUS

DOREMUS は、フランス国立図書館、Radio France、Philharmonie de Paris によって 2014 年に開始された音楽目録をセマンティックウェブ技術に基づいて記述するためのプロジェクトである。多言語による典拠データ、タイトル検索の複雑さなどを克服するために FRBRoo に基づき、クラスとプロパティを規定して語彙を構築している。また 3 機関でのデータの同定について、様々な工夫がされていることが発表され、興味深かった。

筆者の理解不足と思うが、モデルを見る限り work、expression の実体と performance、recording という event が同レベルで扱われており、これらの実体をどのように識別しているのが不明なことが疑問として残る。当該オントロジーは、筆者の研究と関連していると思われ、FRBRoo をさらに検討した上で改めて整理したい。

チュートリアルは、ワークショップ形式ではなく DOREMUS の具体的な紹介だった。プロジェクトの目的、音楽情報（楽譜、コンサートプログラム、演奏、録音資料）の記述について、DOREMUS データモデルについて、データ変換とリンクについて、の説明が行われた。

<TEI, MEI, FRBR, Linked Data> セッションでは、(i) リブレットプロジェクトにおけるスキーム検討、(ii) FRBR の音楽情報を扱うスキーマとの互換性の検討、および (iii) 演奏媒体のリンクトデータ化における技術的な問題が発表された。

(i) リブレットプロジェクト

本発表は、リブレットについては既に様々なデータベースがあり、十分な量のデータも蓄積されているが、網羅的に検索することはまだ実現化していないことを背景としている。リブレットとともに演奏プログラムなどの演奏情報を含めて、様々な利用者の研究課題（検索要求）への回答となるような情報提供を目指して、索引化のモデルを検討している。発表者は、テキ

スト情報と音楽情報を扱えるようにするために、TEI と MEI モデルの利用を提案している。

MEI を利用する利点として、MARC XML との互換性があること、作品にも演奏にも合わせられること、テキストや記譜のエンコーディングが可能なこと、などがあげられていた。また、名前やタイトルの典拠コントロールをどのように扱うかが基本的な検討の一つとして指摘された。

フロアからのコメントで指摘されたが、各作品について文脈によってあるいは取り扱う観点によって様々な解釈が可能な場合に、どのように利用者からの質問に対応するのかについては、より高度で洗練された工夫が必要であろう。筆者の理解では、TEI や MEI などのスキームを採用することは、データを扱えると言う意味で問題がないように思われるが、上述の対応を可能にするには、それらの枠組みにどのようにデータを記述していくのか、という検討ではないだろうか。筆者の研究課題はまさにその点にある。

(ii) FRBR と MEI の互換性

本発表では、2013 年から MEI で採用されている FRBR の可能性を検討したものである。特に FRBRoo での互換性について取り上げ、FRBRoo でコンテンツレベルの表現が可能になるべきであるとの指摘があった。

手稿譜と印刷譜の取り扱いの違いについては Detmold Court Theatre Project が、作曲プロセスの理解や識別については Beethoven Werkstett が事例として用いられ、興味深かった。

(iii) 演奏媒体情報のリンクトデータ化

筆者は、残念ながら本発表を聴講することができなかったため、プログラム要旨に基づき概略のみを紹介する。本発表は、音楽演奏媒体ソースラス (LCMPT) のリンクトデータの開発について技術的な問題および新しい環境でのより正確な表現のあり方についての紹介だった。

背景として、アメリカ音楽図書館協会 (Music Library Association, MLA) では、ジャンル・

形式の用語、音楽演奏媒体など、アメリカ議会図書館に協力して統制語彙構築 (LCMPT) を行ってきたこと⁷⁾、また、BIBFRAME 開発にも積極的に参加していることを覚えておこう。このように、リンクトデータ化の素地は整っていたと考えてよいと思われる。

また、セマンティックウェブ技術を使ったフランス国立図書館の data.bnf.fr project では、リレーター語彙をアメリカ議会図書館の語彙とマッピングさせていることから、今後演奏媒体についてもマッピングの可能性を期待できるだろう。

まとめ

筆者が参加したヨーテボリ会議 (2006 年) やナポリ会議 (2008 年) 時では、コレクション紹介を兼ねた音楽資源のデジタル化やデータベース化に関する発表が目立ち、ダブリン会議 (2011 年) ではディスカバリサービスがメインのセッションで取り上げられていたと記憶している。今会議では、目録の枠組みを超えたデジタル情報を活用したサービスについての発表があり、上述のように Tutorial session も開催された。筆者は毎回参加しているわけではないのであくまでも印象の域を超えないが、目録といった特殊な環境での主題に特化した議論から、ビジネスまでを含む分散環境での情報サービスに視野が広がっていることを実感できた。

日本国内においても 2018 年には新しい目録規則が刊行される予定であり、目録環境も大きく変わるであろう。ウェブ環境でのメタデータの検討がさらに進むことが期待される。

引用・註

1) 2016 IAML Congress, Rome, Italy: programme with abstracts (last updated 30 June 2016). http://www.iaml.info/sites/default/files/pdf/2016-06-30_iaml_rome_programme_with_abstracts.pdf, accessed 2016-07-17.

2) 2016 IAML Congress, Rome, Italy: materials presented in the sessions. <http://www.iaml.info/de/congresses/2016-rome>, accessed 2016-07-17.

3) Gorman, Michael. RDA: the Emperor's new code. JLSI.it, 2016, vol. 7, no. 1, p. 102.

4) Gorman の議論は、あくまでも AACR2 の改訂を想定しており、本研究の目標とは異なることを付言しておく。

5) The CIDOC conceptual reference model. working drafts and releases. <http://www.cidoc-crm.org/frbr-drafts.html>, accessed 2016-07-17.

6) 当該プロジェクトの背景等についてはアメリカ図書館協会での BIBFRAME に関する特別作業部会 (部会ウェブページ http://www.musiclibraryassoc.org/mpage/cmc_bibframe_tf, MLA2015 年次大会報告 <https://c.ymcdn.com/sites/www.musiclibraryassoc.org/resource/resmgr/BCC-BIBFRAME/2015MARctoBIBFRAMESummary.pdf>) を参照のこと。

7) LCMPT の最新情報は、MLA Cataloging and Metadata Committee ウェブページに掲載されている。Music Library Association. Cataloging and Metadata Committee. Genre, Medium, Subject, and Other Controlled Vocabularies. http://www.musiclibraryassoc.org/mpage/cmc_genremediumproj, accessed 2016-07-17.

(いとう まり)



Concert 'La Scala del cielo' at the Church of Santa Maria dell' Anima
Ensemble SeicentoNovecento, Flavio Colusso (cond.) (7月5日)

IAML2016 ローマ大会 ～ Semantic Web の時代へ～

藤堂 雍子

相次ぐテロ、押し寄せる難民、日本語で確かな情報を取ることが必要と思われ、テルミニ(鉄道中央駅)に隣接した宿をB&Bに決めたのは、日本人とイタリア人の夫妻がオーナーだったことに依る。会議場や主要な街中へのアクセスも駅を介在させることが何かと便利であった。加えて現地でいつでもオーナーとやりとりできる携帯を貸与というサービスも有難かった。空港からノンストップ専用列車で夜到着、ホームまで、オーナーが迎えてくれた。ポリスや銃を携えた兵が必ず要所にいた。これがパリ襲撃事件以降のヨーロッパの都市の日常だとはいえ実際のイタリアは、それほどナーヴァスではなかった。七月上旬の熱い盛りだったが、湿度は東京ほどではなく、会議場も昨年のジュリアードほど冷え冷えしてもいなかった。街中から一歩離れ、緑の多い地域だったからかもしれない。

4日(月)初日、旅立つ前に、地震のお見舞いも兼ね、旅の助言を求めて連絡した熊本大学の山田高誌氏が、初日に会議場に現れた。「びっくりさせたくて」と云いながら。被災地熊本の八千代座復興にも秘かな情熱を抱いている山田氏は、在ローマ日伊文化協会に掛け合い、熊本でのイタリア伝統仮面劇(コンメディア・デッラルテ)公演¹⁾や国際フォーラムを開催するための算段をしながらの会議参加だった。「こうして会議でいろいろな報告を聞くことが、熊本では考える暇もない今、孤立して考えることに勝る」と山田氏の言や良し。この原稿作成中もイタリアでのチマローザ学会に参加中とのこと²⁾。

5日(火)午後、私がぜひとも聴いておこうとレジュメを読みながら思った「目録委員会」。フランスから提案されているDOREMUSを専ら傾

聴した。数年前からプロジェクトの存在が喧伝され、フランスはもとよりカナダやイタリアの目録委員会メンバーからも年間を通じて、FRBRの進展と併行してアナウンスがあった。今のところインターフェイスも明らかではない未来志向のコンソーシアムと位置づけるしかない「序論」だが、多くの参加者が集まった。BnF(フランス国立図書館)、パリ交響楽団、ラジオ・フランスほか、音楽博物館や音楽関連団体が共同参加し、オントロジーの概念に沿って、音楽活動における多言語・類義・語彙を精査し、semantic web(類義の蜘蛛の巣のような)を構築しようというプロジェクト、DOing REusable MUSical data(音楽データ再活用)を形成しようとしている。オントロジーという概念は、10年以上前から口には上っているが、Semantic Webとして実装しようとしている。図書館目録MARCにおけるFRBRの進展、フィルハーモニーや放送局の公演データMARC、そして博物館が持つCIDOC CRMモデルの果実を繋ぎ、音楽を主題としたコンソーシアムへの展開を目指している。このプロジェクトはIAML会議直前のIFLA(米OHコロンパス)でも発表され、カレントアウェアネス上でもおおざっぱながら触れられている³⁾。ここでは、IAMLで公表された44ページにわたるフリップ⁴⁾をご紹介しておこう。Googleを介在すれば、日本語での解説もかなり入手できる。FRBR(書誌レコードの機能要件)を提唱したBnFの解説は、とても理路整然としていたことを思いですが、この新たな提案へのディスカッションは、むしろこれからだろう。常に学問というフレームに留まらない演奏(実演)記録や作品バックグラウンドを伴うのがミソか。2017年MLA年次大会(米FLオーランド)でもセッションが用意されている。今後の成り行きが注目される。

7日(木)午前中、RILM国内委員会の事務を務め、IAMLには未会員ながら、荒川会長の同

行者として参加された那須聡子氏（修論でメシアン研究）には、BnF 音楽部門の M-G. ソレ氏を紹介できた。ソレ氏は、元々は、サンサーンスの研究者だが、昨年東急文化村で開催された E. サティ展のフランス国立図書館側の書誌情報提供者として準備のため来日もされていた。今回 IAML では、作曲家アーカイヴの一環として、最近遺族から寄贈された膨大なメシアン・コレクションについて、いずれ「メシアン展」を準備する立場から「例外的な導入、紹介と取り扱い方法」と題し、その調査過程が報告された。日本でのメシアン研究の実態も知りたいと思っておられ、那須氏にも日本の情報提供を求められたと聴いている。傍ら、日本版「サティ展目録」が情報提供者であるソレ氏の元に届いていないことが判り、私もひと役、帰国早々手配した。双方向で一気にこうした交流が可能になる。予期せぬささやかな成果と云えよう。

同日午後は、歴史的楽譜や手稿譜の電子化が急速に進められている一方、「今何処にいて、何処に向かっているのか」と立脚点を確認するためのセッションがプリンストン、ハーヴァード、モンリオール大学、モーツアルテウム財団から多様な蓄積の報告もあった。

こうしたセッションの前後には、例年通り、夕方から街中の教会でのコンサートに練りだし、水曜日の日中には、エクスカッションも楽しめた。会議場アウディトリウム パルコ デラム ジカ内の聖セチリア国立アカデミア・ホールでの学生オーケストラも、興味深く聴けた。A. パッパーノ指揮によるガーシュインのラプソディー・イン・ブルーの公開リハーサルは、ダイナミックでピアニストとのアンサンブルがなかなか聴きモノだった。一方、多くの参加者が期待したヴァチカンの貴重な音楽資料を観るはずのエクスカッションは実施不可となってしまったため、急遽 3つのグループに分割され、選択の余地すらなかったのは残念だったが、私のグループは、ナ

ヴォーナ広場界隈のパンテオン、ジェズ教会、ミネルヴァ教会などを巡り、最後にテヴェレ川を挟んだトラステヴェレ（古代ローマの遺跡が多数残る低地）にある教会で、聖チェチリアが横たわる祭壇やモザイクが彩るカタコンベのような地下礼拝堂を訪れた。初期ローマの殉教者として、音楽を尊ぶ聖人として崇められている聖チェチリアに因む教会だ。にわかガイド役の聖チェチリア国立アカデミーの A. ビーニ氏と帰途ご一緒し、旧聖チェチリア音楽院と同名の国立アカデミーとに最近分立していること、イタリアの文化教育政策が著しく変容し、高等音楽教育機関が改編されていることなど漏れ聴いた⁵⁾。あれもこれも財政難による構造変革のようだ。英国の EU 離脱劇が始まり、米国大統領選挙が思わぬ方向で決した今年は、歴史に残るターニングポイントになるかもしれないことを今になって感じる。来年は、ラトヴィアのリーガが主催地として既に着々準備が始まっている。エストニア（2003）に続くバルト三国 2 回目の IAML 大会となろう。

註

- 1) 暮れ 12 月 7 日、熊本大学・日伊修好 150 周年記念事業実行委員会・イタリア文化会館大阪主催で熊本の八千代座で、ボローニャ・フラテルナル劇団による即興仮面喜劇「ドン・ジョヴァンニ」公演が催された。
- 2) チマローザの生地で開催された学会プログラム最終日に山田氏発表。 http://www.sissd.it/bollettini-sissd/doc_download/363-programma-commedia-e-musica
- 3) カレントアウェアネス及び IFLA サイトでの引用 <http://current.ndl.go.jp/taxonomy/>
<http://library.ifla.org/1322/1/choffe/pdf>
- 4) DOREMUS プレゼンテーション・フリップ http://www.iaml.info/sites/defaultpfm/files/pdf/introducing_doremus_pc.pdf
- 5) 番外編 IAML ローマ大会 Facebook 参照 <https://www.facebook.com/yasuko.todo.9>

初めて国際大会に参加して

山本 宗由

今回、大会参加助成金をいただき、初めて IAML 国際大会に参加した。私が IAML に入会してもう3年ほど経つが、国際大会に興味はありつつも、お金と言葉の不安からこれまでずっと参加をためらっていた。今回助成を受けるに至ったのは、一年前の IAML 日本支部例会の懇親会の席で、助成に応募したいと勢いで伝えてしまったことが始まりだった。その時も不安はつきまっていたが、口にしてしまえばなんとかなるもので、とてもすばらしい経験とともに初めての国際大会を終えることができた。

まず、国際大会の内容に移る前に、参加申し込みについて述べたい。参加を申し込む際に悩んだのが、メンターをつけるかどうかであった。国際大会へ初参加の場合、参加をサポートしてくれるメンターをつけることができたのだが、いかんせん言葉の不安もあり、しばし申し込み画面を前に悩んだ。悩んだ結果、今回しかつけられないのだから、せっかくならと思ひ、Yes にチェックをいれた。これが正解であった。

会議2日目にメンターとの顔合わせがあったが、たまたま初日のレセプションの時に会うことができた。筆者のメンターはオランダ人の音楽ライブラリアンであり、とても明るく気さくな女性であった。簡単な挨拶を済ませた後、彼女に何人かの同僚を紹介してもらった。レセプションを通して感じたことだが、どのメンバーも親切であり、また言葉に不安があるのは筆者だけではないこともわかった。英語が母国語でない参加者も多く、お互いがお互いを気遣っているのが伝わってきて、当初の不安や抵抗はかき消された。

日本支部の中では、IAML は敷居が高く入り

づらい、といった声があると聞いていたが、少なくとも国際大会の場合はそんなことはなく、とてもフレンドリーであたたかい場であった。初日からすでに、これまでの自分の中にあった IAML のイメージとは違うものを感じていた。

ここから先は、筆者が参加したセッションの概要をまとめたい。ここで各セッションについて詳しく述べることは紙面の都合上難しいが、なるべく多くの内容を紹介することで、筆者が感じた国際大会での議論の多様性を伝えようと思う。

(1) Cross-searching for Data

このセッションでは、Alexander Street が提供しているプラットフォームである、Open Music Library が紹介された。open とついているが、いわゆるオープンアクセスではなく、有料コンテンツも含まれている。資料のアップロードが誰でもでき、ソーシャルタグをつけることなどができること、資料のレコードに誰でもアクセスできることが、オープンとついている理由だそう。この発表では、これからは無料・有料コンテンツの両方を一元的に検索できることが求められることが強調されていた。

すべてを一元的に探せるというのは最近の潮流であるが、特に音楽資料は形態が多様で分散してしまいがちなため、このようなプラットフォームが提供されることは有意義なことと思われた。

(2) Student Sourcing: Toward Resources for Students, Managed by Students

このセッションでは、学生に Wikipedia を編集させるという取り組みが紹介された。この発表ではチマローザなどの作曲家のページが例として挙げられた。学生が Wikipedia の編集をすることの意義として、学生のスキルアップにつながるのみでなく、自国の言語による Wikipedia のページの質が上がるということが

挙げられた。最近では日本でも Wikipedia の質を上げる種々の取り組みがなされており、国内の大学でも取り入れられそうな事例と感じた。

(3) New Services and Technology Solutions in Libraries

このセッションでは、楽譜の PDA (Patron-Driven Acquisition) モデルについて、フロリダ大学図書館の事例が報告された。PDA モデル自体はよく話題にのぼるが、楽譜の契約例について聞くのはこれが初めてであった。利用は 8 割が教員であり、残りは大学院生であるため、今後は学部生をターゲットにしたいとのことだった。なお、年間約 12,500 ドルの予算がつけられ、1 ヶ月の購入状況として、2016 年 6 月は 88 件購入に至ったとのことだった。

(4) Music Research: Problems and Methods

このセッションでは、図書館ガイダンスの事例報告がされた。宝探しゲームに見立てて問題を解いていき、その過程でレファレンスツールについて、OPAC や統一タイトルについて、図書館のレファレンスサービスについてなど、図書館の基本的な使い方が習得できるようにされていた。興味深かったのは、報告の内容が決して高度なものではなく、日本でも行われているようなガイダンスと大差ない内容だったことだ。よく日本と欧米の図書館の格差について言われるが、利用者教育に苦勞しているのは日本だけでないことがわかり、驚くとともに少しほっとした瞬間であった。

(5) RILM Open Session

ここでは大会中企業ブースでも宣伝されていた RILM の新製品について紹介された。RILM Abstracts のフルテキスト版、RILM Encyclopedia、MGG Online の 3 つについて、概要が説明された。筆者は図書館員ではないため、帰国後所属大学の図書館員の方に製品を紹介

したのだが、ちょうど業者から案内が来たところとのことだった。

このセッションでは、製品に対して図書館員による活発な議論がなされていた。業者からの情報だけでなく、様々な音楽図書館員の見方も知ることができ、意思決定のための情報交換の場として、音楽図書館員には有益なセッションであるように思われた。

(6) Music Digitization

ここではデジタルの音楽資料の現状が報告され、フランス国立図書館の電子図書館 Gallica や、プリンストン大学図書館が作成した Guide to Digital Scores などが紹介された。

また、このセッションではデジタル化された楽譜が、OMR 処理されていない単なる画像ファイルとして、Web 上に散らばっているという問題が提起された。今後、OCR や OMR などの技術により、楽譜の内容から探せるようになることによって、利用可能性が広がることが示唆された。

以上、一部ではあるが、筆者が参加したセッションの概要をまとめた。セッションに参加した後で感じたのは、日本支部で行われている例会発表などと比べて、圧倒的に音楽図書館の現場における議論が多かったことである。また、音楽図書館だけではなく、公共図書館や国立図書館など、多様な図書館のライブラリアンが参加しており、IAML という組織の大きさを改めて実感した。

なお、各セッションのアブストラクトは、現在でも国際大会のサイトから閲覧できるため、関心を持たれたものに関しては、そちらも見ていただければと思う。サイトにはポスター発表の資料なども公開されている。

すべてのセッションの後、最後に総会が開かれた。まだまだ IAML についてよく知らない筆



会場近くのレストランで昼食(7月5日)
 (左列) 藤堂雍子、山田高誌、筆者
 (右列) 那須聡子、荒川恒子、伊藤真理

者にとっては、ただただその場で聞いているだけという感じであったが、その中で配布された会計報告が目にとまった。話には聞いていたが、支部会員が数名しかいない国もあるなかで、日本支部の人数は決して少なくなく、欧米主要各国を除けば、本部に送金している金額も比較的多い方であった。IAMLの中で日本は決して小さな存在ではないことを確認して、今後日本支部がIAML全体の中で存在感を増していければと思った。

今回、様々なセッションに参加して感じたことだが、多くの話題は日本の図書館情報学の領域などで議論されている内容と大きな差はないように感じた。図書館の事例報告なども、日本でも日常的に行われていることである。しかし、やはり一番問題になるのは、日本では音楽をベースとしてそれらの議論や意見交換が行われていないことであろう。音楽分野に関心を持っている図書館情報学者が少ないことや、音楽図書館員の事例報告・意見交換の場がないことが問題として挙げられるが、今後日本においてもIAML国際会議で行われているような議論がされるようになればと思う。また、そのためにはまずはより多くの人に国際会議に参加してもらえればと願うばかりである。

(やまもとむねよし)

IAML ローマ大会参加の記

久保 絵里麻

2016年7月3日～8日にかけてイタリア・ローマで行われたIAML第65回国際大会に参加した。会場は市内中心部から北へ少し離れた高級住宅街に建てられた(2002年12月オープン) Renzo Piano 設計による Auditorium Parco della Musica (音楽公会堂公園) であった。

参加の主な動機は、筆者が「若手・中堅会員による検討会(仮)」(以下、検討会)に所属していることである。2016年6月の例会で、「検討会」によるパネルディスカッションが行われたが(本紙58号参照)、その後も検討会では、特に「若い図書館員」の入会を促すための方策を練ってきた。今後もこの活動に加わってゆくのであれば、年に一度の国際会議という本部の事業に参加し、会員と直接会い、話すことで、日本支部としての役割(支部規約第2条「目的」参照)をより深く理解し、検討会としての支部活動にも貢献できるものと考え、参加を決めた。

私費での参加なので、比較的気楽に参加するつもりでいたが、秋のIAML日本支部例会で「ローマ大会報告」を行うことを筆者自ら提案、筆者も報告することが決まり、そういうわけにもいかなかった。これまで国際大会への参加報告はNewsletterという形態をとっていたが、せっかくの参加経験を個人の体験のみに留めるのではなく、支部として共有することで、「日本支部としては何ができるのか」ということを考え、支部活動の活性化のために活かしたいというのが提案の趣旨であった。

今回「ローマ大会参加の記」寄稿にあたり、大会プログラムの紹介などは省くこととした。IAML本部では、大会実施前の宣伝、開催中の情報、開催後の報告のために、ホームページ、

Facebook、Twitter 等を利用して情報を発信しており、そこでプログラム・要旨・発表資料・動画・写真・各国の会員が投稿した大会参加日記などが閲覧できるからである。以下に、大会の感想を述べる。

大会では、初参加者や経験の浅い会員に配慮した制度が敷かれていた。例えば、「Mentors & Mentees 制度」がその一つである。大会参加登録時、申込書に Mentee（あるいは Mentor）として登録するかどうかを選ぶ項目があり、Mentee として登録すると経験ある IAML 会員が Mentor となって、サポートをしてくれる制度である。登録後、担当の Mentor と Mentee 宛に管理者からメールが届き、開会翌日の休憩時間に、指定場所で自分の名前を書いた紙を持った Mentor と会うという段取りになっている。Mentor と Mentee は、違う国の出身者同士になるように手配されているという。

また、初参加者に対しては、大会初日の朝に IAML 本部役員会メンバーによる「歓迎会」が開かれ、役員の自己紹介や組織の役割について説明があった。

強調しておきたいのは、参加者の大部分が図書館員だということである。配慮の行き届いた大会の雰囲気の原因について、「職業柄、人を助けたいという気持ちが強いのでしょうか」と古参の会員に教えられて納得した次第である。

更に、一部のセッションのみだが、参加が叶わない会員のために、今回「IAML 史上初」という Live Streaming が採用されたことも報告しておく。

前述したとおり、Live Streaming 動画のみならず、発表資料（スライド・ポスター）のほとんどが本部のホームページから現在も閲覧可能である。これらは、パワーポイントや PDF ファイルに直接リンクしている場合もあるし、「SlideShare」という共有サイトにリンクしているものもある。IAML が音楽資料に関する情報

の共有を主眼とした組織であるから、こうした取り組みには積極的なのであろうと思う。

筆者が参加したセッションを見る限りにおいて、学会とは異なり、質疑応答の折に補足説明を求める以外に、質問や討論への発展がみられなかったのは、IAML という組織の目的と、その大会が持つ、いわば見本市のような性質ゆえであろうと理解している。

しかしながら、次に挙げるような、各国に共通の問題が見出された。例えば、公共図書館における集客の試みを報告した Marianna Zsoldos 氏 (Bródy Sándor Public Library, Eger) をはじめ、多くの発表から、一般利用者の図書館離れという問題や、音楽資料の価値とその保護・管理の必要性を広く訴えねばならないという問題意識が見て取れた。

また、「(音楽の) 先生たちは図書館に来ない」という、Jörg Muller 氏 (Hochschule Luzern) の発言を聞いて、会場の参加者は苦笑したが、一研究者として筆者には、それが専門家の (音楽) 図書館ないしは資料に対する意識の低下を示す現象であるように見え、笑ってすませることはできなかった。

もうひとつは、デジタル化についての問題である。今大会では、主催国のイタリアをはじめ、各国の音楽資料データベースや総合目録作成プロジェクト (イタリアの ICCU, CeDoMus Toscana, フランスの DoReMus 等) など、デジタル化の一層の進化を感じたが、ある発表に対するコメントとして、Annalisa Bini 氏 (Accademia Nazionale di Santa Cecilia) から「デジタル化の弊害として、典拠の記載漏れを招きやすいという問題がある」との指摘があった。これは、発表で使用した画像に典拠元が記されていないことに対する指摘で、「発表した資料の所蔵元がすべて同じなので記載を省略した」との回答を得て解決を見たが、筆者にとっては、研究者としての倫理が問われる問題を誘発する

要因として、デジタル化の問題点を再確認する機会となった。一つのデバイスを通じて各国資料館の資料の閲覧が可能になった一方で、「いつ、どこで何を閲覧したか」という情報は利用者にとって、曖昧になりやすい。典拠の記載漏れや、盗用・剽窃を招いてしまうのであれば、利用者のみならず、資料を提供する側も対策を練る必要があるのかもしれない。

以上のような問題はもちろん各人、各機関、各国が取り組むべき問題ではあるが、各国から参加者が集う IAML 大会のような場でこそ、一つのコメントに留めず、ラウンドテーブルなどの場で問題として共有し、話し合う場を持てば、他国との連携の下で今後何らかの対策を講じることできるのではないかと思う。こうした問題を、自国のみならず各国共通の問題として捉えなおす機会を得たことは、大会に参加してこそその成果だったと思う。

最後に、「検討会」の一員として、国際大会について考えたことを述べたい。「本部が行っている国際的な業務を日本国内において推進」するという日本支部の目的を考えた時、毎年行われる国際大会で得た知見を日本支部内で共有し、活かす道を検討することには、ある程度の価値があるように思われる。例えば、日本支部内（全体あるいはグループ）で、大会前にプログラムや発表要旨を読み、発表・セッション・プロジェクトの内容等を吟味しポイントを押さえたうえで、参加者は支部代表として国際大会に参加し、帰国後に報告会をするという一連の流れを作ってはどうか。簡単なことではないが、大会参加者のみならず、より多くの日本支部会員が海外の事情を把握し、日常の業務などにも活かすほか、IAML 日本支部が音楽資料に関わる人材を育成するための場として機能するきっかけになるのではないかと思う。特に、R プロジェクトなど、本部との連携が必要な事業



サンタ・チェチリア音楽院オーケストラ公開リハーサル
(Antonio Pappano 指揮 7月8日)

については、参加者が国際大会の場で関連イベントに積極的に関与し、帰国後も維持していくことができれば、次第に日本支部としての「目的」を果たすことにもつながるのではないか。

筆者自身は、自分の興味関心以外に、一種の使命感をもって参加することで、ローマ大会を一層意義深いものとして体験できたように感じた。もちろん、研究者としても、各国の会員と研究の話をしたりして、大変良い経験をした。ぜひ、日本からは図書館員の会員の方々に出向いて頂きたいと思う。前述の通り、IAML 国際大会参加者は、図書館員の会員が圧倒的に多い。話題も専ら図書館学や利用の傾向などがメインであるから、日本から多くの図書館員の参加があれば大いに歓迎されることと思う。

(くぼえりあ)

ギリシャに IAML 支部

IAML 各国支部にギリシャが加わった。27 番目の支部設立である。支部長は A. カルキオラキス Alexandros Charkiolakis 氏（エロル・ユーセル音楽図書館長）。事務局はアテネの楽友協会附属ギリシャ音楽図書館にあり、事務局長は同館館長 V. クリージ Vera Kriezi 氏。IAML 本部サイトに同国の最近の音楽資料状況が報告されている。

<http://www.iaml.info/national-branches/greece>

(編集部)



日本支部役員選挙 2017

本年は IAML 日本支部の役員改選の年です。選挙は 3 月より下記のスケジュールで実施致します。候補者推薦受付 (3 月)、候補者発表・投票 (4 月～ 5 月)、選挙結果発表 (6 月総会時)。なお、支部選挙は規約により郵便で行われます。(選挙委員会)

リガ国際大会および大会初参加者のための補助金

本年度の IAML 国際大会は、既報の通り、6 月 18 日 (日) より 22 日 (金) までラトヴィア共和国リガ市で開催される。開催国ラトヴィア支部を中心に準備が進められており、大会プログラムおよび参加要領などは 2 月 1 日に発表予定である。<https://iaml2017.lnb.lv/>

日本支部では、国際大会にはじめて参加する個人会員 (図書館等職員並びに非常勤講師等の研究者) および団体会員の各機関所属メンバーに対し、補助金制度を設けており、現在リガ大会に向けて募集中である。応募締切は 5 月 20 日。詳細は事務局長・長谷川までメールにてお問合せください。
yumikoha@mountain.ocn.ne.jp

国立国会図書館遠隔研修「音楽資料概論—音楽資料とはなにか」スタート

国立国会図書館では、インターネットで受講する図書館員向け遠隔研修を実施しているが、本年 1 月 18 日より、音楽資料に関する研修教材として公開講座「音楽資料概論—音楽資料とはなにか」(講師・伊藤真理氏) の提供を開始した。音楽および音楽資料・情報の概要と特性など、音楽資料 (楽譜、AV 資料) の利用、検索にあたって必要な基礎知識を学ぶ。講座時間 90 分。受講登録は特に必要としない。
<http://training.ndl.go.jp/course/under.html?id=57>

音楽図書館協議会

音楽図書館協議会は、11 月 10 日に開催された臨時総会において、次の通り、新執行部を選出した。

【理事館】 東京音楽大学付属図書館 (理事長館)、

昭和音楽大学附属図書館 (副理事長館)、大阪芸術大学図書館 (研修担当) 【監査館】 エリザベト音楽大学附属図書館。加盟館は昨年未現在 26 館 (正会員)。

秋の支部例会

2016 年秋の支部例会は、11 月 6 日 (日)、東京芸術劇場小会議室で開催された。発表は次の通り。「音楽資源のためのジャンル / 形式用語マニュアル」出版の意義

鳥海恵司 / 田島克実 (株式会社トッカータ)
IAML ローマ大会参加報告 (本号掲載)

久保絵里麻 / 山本宗由

鳥海、田島両氏の発表並びに例会傍聴記は次号に掲載予定。

本紙オンライン版に ISSN (申請中)

本 Newsletter は冊子体のほかに創刊号からのバックナンバーも含めて支部サイト内に掲載、公開している。サイト掲載版に電子ジャーナルとしての ISSN を付与することとし、目下登録申請中である。

最新ニュースを支部サイトで

支部からのお知らせは随時支部サイト「最新ニュース」欄に掲載しています。折々のチェックをお願い致します。<http://www.iaml.jp>

会員の異動

入会 工藤哲朗氏

退会 青木香子氏、寺本圭佑氏、三田智子氏、
米田かおり氏、フェリス女学院大学附属図書館

会費納入のお願い

会費未納の方は、至急御送金をお願い致します。会費納入のお願いと書類一式は昨秋にお届け致しております。お問合せは会計まで。yokogmp@gmail.com

Newsletter — 国際音楽資料情報協会日本支部
第 59 号

2017 年 1 月 30 日発行

国際音楽資料情報協会 (IAML) 日本支部
〒171-8540 東京都豊島区南池袋 3-4-5
東京音楽大学付属図書館内
<http://www.iaml.jp>